古代飛鳥の国際性と文化交渉

― 広域的都市計画と要塞化 ―

高　橋　誠　一

Internationalism and Cultural Interaction in Ancien *Asuka*

― Extensive Master Plan and Fortification ―

TAKAHASHI Seiichi

The political centre of seventh-century Japan was Asuka. Asuka is presently located in Asuka-mura Takaichi-gun Nara Prefecture. Within the narrow confines of this region, temples were constructed as well as a series of imperial palaces, the new replacing the old. There was also an installation, known as the “mystery stone structure” sekizōbutus 石造物, the purpose of which remains unclear. For the time, however, an extremely advanced culture flourished. Immigrants from the Chinese mainland and the Korean Peninsula brought with them new scholarship, arts and techniques, and Asuka was truly a stage for cultural exchange and cultural negotiation. Here, ideologies and perspectives from each region in Asia confronted differing ideologies and perspectives to fuse and rival with others.

キーワード：飛鳥「京」、藤原京、古代朝鮮式山城、大和三山、石の文化、古代朝鮮、渡来人

一　はじめに ――東アジアにおける文化交渉の舞台としての古代飛鳥

6世紀末から7世紀、飛鳥は古代日本の表舞台であった。現在の日本の面積は約37.8万平方キロ、そのうち奈良県の面積は約0.37万平方キロである。古代の大和と現在の奈良県の範囲はほとんど変わりがないから、日本古代史の中心であった大和は、現在の日本のわずか100分の1であったことになる。また、現在の明日香村の面積は約24平方キロである。この面積は、奈良県の約150分の1である。したがってごく概数的に言えば、明日香村の範囲は、現在の日本の約15000分の1を占めるに過ぎない。もっとも、古代の日本と現在の日本の範囲が大きく異なることは言うまでもないが、ごくごく大雑把に言っても、当時の日本（大和、倭）のわずか1万分の1程度の狭小な地域が、古代日本史の中心舞台であったことになる。

この限られた空間は、単なる日本史の表舞台というだけではなかった。東アジアの最東端に位置する

島国であるにもかかわらず、というよりも最東端であることによって、西方からの諸文化が集積する終着点であった。飛鳥が西方からの先進的な文化の終着点に位置していたという事実の持つ意味は、あらためて考えてみればきわめて重要なことであったと言ってよい。すなわち古代飛鳥は、東アジア世界を結ぶ交通体系のなかに位置していたが、通過点ではなかった。西アジア・中央アジア・南アジア・東南アジア・東アジアなどにおける文化の通り道とは異なって、少なくとも6世紀末から7世紀にかけては、あくまでも終着点であった。したがって、此の地に集積した世界各地からの文化は、互いに影響を与え合い、変質を遂げつつ、飛鳥の地において、それまでとは異質のものを生み出さざるをえなかった。

当然ながら新しい文化が伝来した当初は、文化交流の枠を逸脱はしなかったであろうが、次第に、異質の文化が、融合・切磋琢磨・変質をしていったに相違ない。その過程においては、もはや友好的な文化交流というものではなく、いわば「食うか食われるか」という「相克」という事態も展開したであろう。

たとえば飛鳥において建設された寺院や宮都は、本来は日本の風土の中で生じたものではなく、中国大陸や朝鮮半島から伝来したものであった。隋・唐、高句麗・百済・新羅という複雑な国際情勢の波に翻弄されつつも、「倭」は、それらの国・地域からの先進的文化を受容し、日本の風土に適応するように改良していく必要があった。その際にも、中国や朝鮮半島から渡来してきた先進的知識を持った人たちの助言や拘り、彼らなりの「常識」などが渦巻いたに違いがないし、渡来人同士の主義・主張や相克も絡み合ったであろう。

周知のように、日本最初の本格的伽藍寺院として造営されたのは、飛鳥寺（法興寺）であるが、これは排仏派の物部守屋に勝利した崇仏派の蘇我馬子によるものであった。蘇我馬子は、古代朝鮮三国のうちの新羅に近かったと見られるが、文献史料によれば、飛鳥寺造営の際には、百済から派遣された僧侶や技術者の力が大いに発揮されたとされる。ところが1950年代の発掘調査によって、飛鳥寺の伽藍配置は当初予想されていた「四天王寺式」ではなく、「一塔三金堂式」であることが確認され、「飛鳥寺式」伽藍配置とされるにいたった。そこでその類例が古代朝鮮に求められたが、日本に最も大きな影響を与えた百済には存在しないことがわかり、意外にも、高句麗の平壌の清岩里廃寺と共通することが明らかとなった。この伽藍配置に関しては、なお百済の影響を重視する意見もあって、必ずしも確定はしていないが、従来から強調されてきた「百済色」だけではなく飛鳥寺造営においては、「高句麗色」もまた濃厚に認められるのである。高句麗僧の慧慈や推古紀の記事にある高句麗からの黄金300両など、日本との間に百済・新羅の二国が介在している高句麗との深い関係をも熟考する必要があろう[1)]。

さらにまた、飛鳥寺造営に限ってみても、寺工の名前などから、技術者の多くは「ペルシア」の工人ではなかったかという伊藤義教氏の指摘などもある。また、飛鳥には「トカラ」からの人も来訪したという記録もある。このトカラ人については諸説があるが、最近の西本昌弘氏の論文によれば、アフガニスタン北部地方の人ではないかとされる[2)]。

要するに、朝鮮半島や中国各地はもとより、西アジア、中央アジア、南アジア、東南アジアなどのきわめて広い地域からの文化が流入してきたのが、飛鳥であったと言ってよい。しかもそれは、単にそれ

1）黒崎直『飛鳥の宮と寺』、山川出版社、2007年。黒崎　直『飛鳥の都市計画を解く』、同成社、2011年。

2）西本昌弘「飛鳥に来た西域の吐火羅人」、『東西学術研究所紀要』43号、関西大学、2010年。

ぞれの系譜としてのみならず、複雑に絡み合った展開を示していったであろう。後述する「古代朝鮮式山城」についても、百済や新羅だけではなく、意外にも高句麗の影響も強かったのである。

二　飛鳥・藤原における広域的都市計画

（1）飛鳥・藤原と広域的交通体系

飛鳥は奈良盆地の中央部に位置しているわけではないが、奈良盆地に敷設された計画的な交通体系と密接に結びついていた。この点に関しては、岸俊男氏[3]、千田稔氏[4]、和田萃氏[5]らによる研究がある。それらによって古代奈良盆地の交通体系の整備を概観すれば、以下のようになる。

すなわち、奈良盆地における直線的な古道の敷設と整備は、７世紀にまでさかのぼるが、推古16年(607)、小野臣妹子の隋からの帰国に際して同行してきた隋使裴世清の入京に際しては、額田部連比羅夫が海石榴市まで迎えたとされ、難波から倭京の小墾田宮に至るには、なお大和川水運が利用されていたことがわかる。要するに、現大和郡山市額田部町付近から初瀬川をさかのぼって三輪山の麓で上陸し、海石榴市から阿部・山田道を通って飛鳥に入ったと考えられる。２年後の新羅・任那の使節の入京の際にも、現田原本町阪手付近阿斗の河辺館にまで赴いているから、このときも大和川水運が利用されたと考えられる。

したがって、この時期には外国からの使節を迎えるにふさわしい官道が、難波と倭京の間に完成していなかったと推定されるが、推古21年11月紀には「難波より京に至る大道を置く」という記事がみえ、この大道、すなわち竹内街道を経由する「横大路」が敷設されたとされる。ここでいう横大路は、大坂道と竜田道のうちの大坂道で、竹内峠を越え、河内では丹比道に接続するものである。この道は大和側では横大路と呼ばれ、当麻から東行、高田・八木・桜井を経て伊賀・伊勢へ通じていた。一方の竜田道は大和川の右岸を竜田から斑鳩に至る道で、平城京に移転して以降に難波と大和を結ぶ主要街道として利用されるようになったものである。

この二本の横大路と直交する三本の南北道が、上ツ道・中ツ道・下ツ道であった。これらは、まさに奈良盆地を縦断する大道で、下ツ道は北はのちの平城京朱雀大路に通じ、南行すれば見瀬丸山古墳に達する。そこからは曲線を描きながら巨勢路を西南行し、さらに紀伊国に入って紀水門に至る。中ツ道は北は那羅山を越えて山背路に接続、南は横大路まで直線道路として連続しているが、それより南では消滅している。しかし、この中ツ道を図上で延長すると、天香久山（香具山）の山頂付近を通って飛鳥寺の正門前に達し、さらに橘寺東大門前を経て丘陵に行き当たるが、おそらくは飛鳥川をさかのぼって芋峠を越えて吉野宮に通じていたと考えられる。上ツ道は横大路のやや南までは直線であるが、安倍寺址の東から山田寺の北を通って飛鳥に至った後、西行して下ツ道に交わっていた。

これらの古道は、現代の我々が想像するような単なる線的な道路ではなかった。いわば古代日本の威

3）岸俊男『日本古代宮都の研究』、岩波書店、1998年。

4）千田稔『古代日本の歴史地理学的研究』、岩波書店、1991年。同『飛鳥への道』、そしえて、1984年。

5）和田萃『飛鳥』、岩波書店2003年。

曽我町
地黄町
内膳町
北八木町
小綱町
曲川町七丁目
忌部町
今井町
今井町四丁目
今井町三丁目
四条町
豊梯町
寺田町
新堂町
慈明寺町
山本町
神武天皇陵
大久保町
大谷町
勤公園
東坊城町
近鉄南大阪線
古川町
吉田町
西地尻町
橿原神宮
橿原市
橿原公苑
久米町
川西町
鳥屋町
白橿町
見瀬町
北越智町
南妙法寺町
観音寺町
光陽町
西坊城
500m
0
500
1000
1500

大和三山
栄原町
石原田町
近鉄大阪線
西之宮
法花寺町
出合町
出垣内町
桜井線
醍醐町
高殿町
八釣町
東池尻町
池之内
天香久山
南浦町
北外町
南山町
別所町
上飛鳥町
飛鳥川
小山
田中町
和田町
石川池
豊浦
飛鳥
飛鳥寺跡
大軽町
五条野町
川原
岡
橘
小原
東山
奥山
山田
細川

信をかけたきわめて計画的かつ面的な広がりをも有する壮大な道路であった。たとえば竹内街道の延長である横大路に関しては、その幅員をめぐって諸説が展開されてきたが、橿原市における発掘調査と、現在も地表上に残っている道路・畦畔・水路・地筆界線などをあわせて考慮すると、高麗（高句麗）尺による10丈すなわち約36mもの幅広い直線道路であった可能性が強い[6]。下ツ道の場合なども、これより広い幅員が推定されており、単なる通行や運搬機能としての道路ではなく、国家的な威信をも意識したものであった。

しかも古代の飛鳥は、奈良盆地と難波や山背を結ぶ交通上の拠点であったというだけではない。奈良盆地の南に広がる聖なる南山すなわち吉野や熊野へも通じる基地でもあった。いわゆる谷口集落として、山と平野の結節点に立地する地理学的観点からしてもきわめて重要な地域でもあった、また紀伊国さらに瀬戸内海を経て、朝鮮半島や中国大陸へも通じる交通ネットワークにも位置していたのである。これら南北の古道は、遅くとも天智末年、壬申の乱当時には完成していたとされるが、注目すべきは、これらの壮大な交通体系に飛鳥が組み込まれているということである。必ずしも飛鳥に首都機能が置かれるようになった当初から、これらの広域的計画が整備・完成されていたとは言えないにしても、少なくとも推古天皇の時期に敷設された横大路などの計画道路は、飛鳥と無関係であったはずはない。このこと、きわめて重要であると言ってよいのではないか。すなわち、改めて考えてみると、これらの交通体系の中の飛鳥は、飛鳥における都市計画の存在や、岸説藤原京の重要な意味をも補強していると言いうるのではなかろうか。

（２）飛鳥における都市計画

飛鳥に造営された宮や寺院が、ある一定の基準のもとに建設されたものか否かについては、今日もなお結論が出ているわけではない。しかし、わが国における都市の発生を考える上で、この問題はきわめて重要な意味をもっている。

要するに、飛鳥に都市計画が存在したとすれば、わが国における計画的都市の発生は飛鳥に始まることになり、もしそういう計画がなかったとすれば、藤原京（新益京）の造営をもって、計画的都市の誕生ということになるからである。

７世紀後半の飛鳥において「京」と呼ばれる名称が使用されていたことは、『日本書紀』によって明らかであると言ってよい。すなわち『日本書紀』の孝徳天皇紀、白雉４年（653）の「倭京」、翌年の「倭都」という表現は、天武元年（672）まで使われているし、天武天皇12年（683）から持統天皇９年（695）まで、「京師」という表現も使用されている。

ごく短絡的に言えば、「宮」という表記に対して「京」という表記は、都城として整備された都市ということになるが、飛鳥の「倭京」、「倭都」、「京師」という表現が、はたしてどのような実体を持っていたのかということについて解明されているわけではない。藤原京（新益京）や平城京のような条坊制によって造営された都城と同じように都市計画によって建設されたものか、あるいは倭京、倭都、京師と

6）今尾文昭・高橋誠一「古代横大路の地下遺構と地表遺構――その幅員を中心として――」、『伊達宗泰先生古稀記念論文集　古文化論叢』、1997年。

表記されてはいるものの、都市としての実体は有していなかったものなのか。

この問題に関しては、主として1970年代以降、多くの研究者によって論議されてきたが、そのほとんどが、なんらかの規格的な方格プランないし方格地割が設定されていたとするものであった。「京」すなわち都市計画による都市が造営されたという見解が多く提示されてきたわけである。以下、概観してみよう。

網干善教氏は、飛鳥寺、川原寺、山田寺、大官大寺の塔跡が一定の間隔あるいは一直線上に存在するらしいことから、京域地割が存在したであろうことを推定された[7)]。その方格地割の単位として提起された単位は、令小尺の600尺であるが、これは令大尺の500尺にあたる。この令小尺と令大尺という尺度制は大宝令（701）によるもので、土地測量に関しては大尺を用いること、５大尺を１歩とし、300歩つまり1500大尺を１里とすると定められていた。一般的には高麗（高句麗）尺の名称で知られるものである。

いっぽう、秋山日出雄氏も網干氏と同様の500大尺すなわち令制方100歩の方格地割が施行されていたという見解を提示された[8)]。この秋山氏の論拠は、飛鳥地域に所在している寺院遺跡の伽藍中軸線と占地の状態から、１里（300歩）方格の各辺の三等分点を結ぶ方格線を引くと、各伽藍中心線と適合するというものであった。

1970年代に発表された飛鳥における方格地割を推定する諸説のうちで、最も影響力の大きな説は、網干・秋山両氏の論文に先行する岸俊男氏の一連の論文である[9)]。岸説藤原京の重要な基準となっている中ツ道の延長線と山田道を座標軸として、飛鳥地域には１町＝106mの方格地割が設定されていたことを主張したもので、古代の飛鳥の範囲や倭京の境域についても論及している。この説はその後も敷衍されて令制以前の田積法である代制に関する見解にまで発展していった。

また、1980年代になると、千田稔氏は、1980年代に発表された一連の論文において、飛鳥地域の計画地割についての新しい見解を示された[10)]。すなわち一辺が300歩（1500高麗尺）を一単位とする令制１里の方格を井田制のように９等分割すると、一辺が100歩（500高麗尺）の方格が得られ、更にそれを２等分すると方50歩の区画が36含まれることになるとし、飛鳥においてはこの方50歩（250高麗尺）の方格が、計画上設定されていたとした。

これらの諸説に関して、井上和人氏は、各説の概要を紹介した上で、それぞれについて、厳密な検証を展開、いずれも成立しがたいと論証された[11)]。要するに、井上氏は、６・７世紀代の飛鳥地域には、少なくとも都城の条坊制の前提となるような方格地割はなかったとされたわけである。

この井上氏の検証によって、それまでの飛鳥に方格地割を想定する多くの説は、厳しい批判にさらされることになったことは否定できない。岸俊男氏による１町＝106mの方格地割が飛鳥に存在したとする説が成立する余地は乏しいとする見解が一般的になりつつあるとも言いうる。大藤原京説に対して岸

7）網干善教「倭京（飛鳥）地割の復原――飛鳥地方の寺院跡を中心として――」、『関西大学考古学研究紀要３』、1977年。

8）秋山日出雄「飛鳥京と大津京」都制の比較研究」、奈良県教育委員会『飛鳥京跡１奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第26冊』、1971年。

9）岸俊男「飛鳥と方格地割」、『史林』第53巻第４号、1970年。

10）千田稔「道と地割の計画」、『環境文化』51、1981年。同「条里地割と古地割」、『条里制の諸問題Ⅱ』、1983年など。

11）井上和人「飛鳥京域論の検証」、『考古学雑誌』71巻第２号、1986年。

説藤原京の重要性を強調しておられる西本昌弘氏なども、藤原京の宮域内で検出された先行条坊・先々行条坊ともに天武５年（676）にはじまる新城（藤原京）の造営計画の中で理解されており、したがってこうした条坊を飛鳥地域にまで広がる倭京に結びつけるのは困難であろうとされる。ただし寺崎保広氏の京・京師に関する記事について新城と関係づける見解については、天武９年（680）５月条にみえる「京内廿四寺」は、藤原地域だけに存在した寺院とは考えにくいから、飛鳥地域を包含して「京内」と称した可能性が高いことを述べられ、かつ「新益京」の語義を合わせて、天武初年の京・京師の実態については、さらに慎重な検討が求められるとの考えを呈しておられる。要するに西本氏は、天武初年の京・京師の問題は未解明であるが、岸氏による飛鳥の方格地割論や倭京論は現状では成立困難であるといえるとされ、ただし下ツ道が飛鳥の西辺を南北に貫通し、山田道が北辺を横断していたことはたしかなので、これらを起点とするような一定の、あるいは不統一な地割や道路が、飛鳥地域に存在していた可能性は充分想定でき、今後とも考察を深める必要があろうとの、慎重かつ公平な見解を提示しておられる[12)]。

いずれにしても、厳密な井上氏の論証によって、それまでの飛鳥に何らかの方格プランすなわち都市計画が存在していたという説は、やや影を潜めたように思われる。ただし、飛鳥に方格地割が存在したと言う可能性も、依然として主張されてはいる。たとえば相原嘉之氏による整理では、明日香村域において、18例の道路遺構が検出されており、そのなかには飛鳥の中心部にあって、ほぼ正方位の道路遺構が５例、寺院や宮殿の外郭区画施設で「道路的」な線が５例認められる。黒崎直氏の検討によれば、この10例のなかには、１／５里（約106m）と１／４里（132m）の二種類の数値が隠されているとされる。すなわち１／５里の倍数と、１／４里の倍数の二種類が含まれているのであって、１／５里（約106m）と１／４里（約132m）の単位寸法が抽出できるとされるのである。この寸法のうち、約106mは条里の「一町」を構成する単位（岸俊男説で検討された一町）で、約132mは藤原京や平城京の条坊を構成する単位である。要するに、黒崎氏は飛鳥にはこの二つの「地域計画」施工の可能性の高いことを指摘しておられる。また異なる単位寸法が同時に施工されたことがないとすると、飛鳥宮跡Ⅱ期遺構にともなう１／５里が、Ⅲ期遺構にともなう１／４里よりも先行するとも推定される[13)]。

この黒崎氏の指摘は、きわめて重要な意味を有していると考えたい。氏によれば、飛鳥に「方格地割」がないようにみえたのは、一つの寸法ですべてを理解しようとしたからではないか。使用された寸法に二種類があり、それがある時点で転換したのではないかと考えると、その謎が解けてくるとされるわけである。

このように飛鳥に方格地割が存在したのか否かについての結論は、まだでていない。たしかに井上氏の検証は、きわめて厳密な実証による精度の高いものであるが、それでは、井上氏が説かれるように、飛鳥に計画的な方格プランなどは存在しなかったと断言できるのかと言えば、必ずしもそうとも言い切れない。面積的に言えば、きわめて狭い小盆地に飛鳥の宮殿や寺院は建設されており、単純に考えれば、この狭小な空間に多くの建造物を配置する場合、無秩序に建設を繰り返していくことは、かえって困難

12）西本昌弘「研究展望　岸俊男『日本古代宮都の研究』再読」、『日本史研究』574号、2010年。

13）黒崎直『飛鳥の都市計画を解く』、同成社、2011年。

ではないかと言う素朴な疑問も生じてくる。多くの施設が、厳密には多少の振れを示しつつも、原則としては東西南北方位を遵守しているわけで、そうである以上、やはりなんらかの計画あるいは基準が設定されていたのではないかと考えるほうが自然ではないかとも思える。井上氏の検証は発掘調査成果を踏まえた厳密なものではあるが、であるからこそかえって、基本的なマスタープランあるいは計画線と現実の工事上の誤差という側面が、必要以上に強調されてしまうということになりはしないであろうか。

飛鳥に都市計画があったのか否かについての議論は、先述したように日本の都市史を考える上で、きわめて重要な課題であるし、大きく言えば東アジア世界における都市計画の伝播と波及という研究テーマにも通じるものである。多くの研究が蓄積されてはいるが、今一度、飛鳥地域における地割、それも方格地割に関して、詳細な検討をしなければならないように思える。と言うのは、これまでに周知のものとして扱われてきた明日香村域の条里制についても、完全に解決されているとは言いがたいのである。筆者が以前に検討したように、岸俊男氏の条里復原も、奈良県立橿原考古学研究所編の『大和国条里復原図』（1980年）も、実は誤りを含んでいる可能性が高いのである[14]。要するに、明日香村域における条里制地割に関しては、その里界線の復原をはじめとして、あらためて検討しなおす必要があると言ってよい。また、奈良盆地の統一条里については、1町約109mの尺度が使用されていると考えられるが、岸俊男氏の提示された106mとの関連についても改めて検討しなければならないであろう。また、明日香村域の方格地割については、その使用尺度をも含めて詳細に検討する必要があるのではないか。たとえば1994年に実施した筆者らの現地調査では、岡地区において、109mよりやや短い方格地割の存在が確認できた[15]。岡地区においても、方格地割が残っていることは明らかであるが、この地割は、一見すれば飛鳥寺周辺地区に残っている約109m一辺の条里地割と酷似しているとはいえ、実測した結果、106.0m、106.5m、105.8m、106.0mというような数値が得られた。この調査は、当該地区における一町に近いと思われる区画を現地調査によって計測したもので、あくまでも恣意的なものである。また地表上の計測であって、考古学的な遺構との照合もなされていない。道路脇の溝や道路幅に関しても明確な基準を設定して計測されたものでもない。したがってこの約106mという数値の区画をもって岸氏の主張された106m計画線の拠り所とすることができないことは言うまでもない。しかし、逆に言えば、現実に約109mよりも短い区画が存在していることも事実である。

このようなことを考慮に入れると、明日香村域における方格地割と考古学的な遺構の詳細な照合と検討が必要ということになろう。古代飛鳥地域において、はたして都市計画的なものが存在したのか否か、またその後の条里制の施工の実態はいかなるものであったのか。さらに言えば、明日香村域に条里制が施工されたことは確実であるとしても、いわば古代における圃場整備事業である条里制が、それ以前の飛鳥地域の方格地割をどの程度まで改変したのか。すなわち条里制の施工に際して、全面的に新しい地割に変えられたのか、あるいはたとえば岡地区などではかつての地割が部分的に残されたのかなど、解決すべき課題が残されているのである。換言すれば、飛鳥「京」に伴う方格地割の痕跡と条里制による方格地割の混在も想定できるわけで、現地表面に認められる地割と考古的な遺構に関する検討が必要と

14）高橋誠一「歴史地理学よりみた明日香村」、『続　明日香村史　上巻』、明日香村、2008年。

15）関西大学地理学教室『関西大学地理学教室実習調査報告書1994年度（19）奈良県明日香村の地理』、1995年。

いうことになるのである。

飛鳥に都市計画があったのか否かについては、このように明らかではないが、694年に建設された藤原京（新益京）が方格地割による条坊制の都城であったことは疑い得ない。ただし、都城域については、旧来の岸俊男氏による北を横大路、東を中ツ道、南を山田道、西を下ツ道に囲まれたとする説に対して、より広い範囲とするいわゆる「大藤原京説」が次第に有力になりつつあって、なお確定はしていない。

この大藤原京説は、岸説藤原京の範囲外から、条坊に一致すると推定できる道路遺構が検出されることによって展開してきた。現在までに多くの研究者によってさまざまな大藤原京説が提示されてきたが、たとえば小澤毅・中村太一両氏の説では、平城京と同じく一里（約530m）四方を１条＝１坊とし、10条10坊の京域が推定され、藤原宮は京域の中央に位置するとされる。ただ、大藤原京説の中には、大宝令試行を契機として、大藤原京から岸説藤原京へ縮小したとみる説や、逆に岸説藤原京から大藤原京に拡大したとする説などもあり、これらの縮小説や拡大説では、岸説藤原京は中核部分として位置づけられていて、岸説藤原京は依然として重要な学説であることは否定できない。さらに文献史料にみえる坊令の数や、岸説において重要な根拠とされた古道と藤原京および平城京との密接な関係など、大藤原京説には、解決すべき弱点があることも否めないのである[16]。

すなわち、たとえ大藤原京説が成立するとしても、岸説藤原京の持つ意味は、やはり無視できないと考えられる。北に耳成山、東に天香久山、南に石川池（剣池）、西に畝傍山という四点に囲まれた範囲は、いかにも四神に守られた都城というイメージを喚起させるからでもあるし[17]、先述のように、横大路と下ツ道、中ツ道などの交通体系と飛鳥と藤原の関係など、大藤原京を想定するとすれば、整合しない点も多く生じてくるからである。

およそ古代都城の場所を選定するに当たっては、なんらかの地理観、現代的な感覚からすれば宗教的な地理思想とでも言えるものが反映していたであろうことは否定できないであろう。大藤原京説に、東アジア世界に広く流布していた風水思想や伝統的地理観などと整合する点を見出すことは困難であるように思われるのである。

三　渡来人の飛鳥地理観と「石の文化」

（１）飛鳥の地形と花崗岩

飛鳥の地形に関しては、奈良盆地の南東隅に突き出した小盆地というイメージが一般化している。飛鳥川によって刻まれ堆積した範囲で、周辺を山地によって取り囲まれた小盆地で、奈良盆地からはやや独立した空間というように理解されていることになる。この理解は、基本的には誤りではないが、面積的には狭い地域であるにもかかわらず、実はかなり複雑な地形である。

明日香村の地形については、武久義彦氏の一連の調査研究がある[18]。以下、武久氏の報告によって飛鳥

16）前掲、西本昌弘「研究展望　岸俊男『日本古代宮都の研究』再読」、『日本史研究』574号、2010年。

17）千田稔『平城京遷都』中央公論新社、2008年では、大和三山を神仙思想における三神山と想定している。

18）武久義彦「飛鳥――その地形的一考察」、『地理』24巻第３号、古今書院、1979年、同：Some Considerations on the

の地形を概観してみたい。実は、このような地形は、明日香村の各種の遺跡の立地について大きな意味をもっているのである。

飛鳥にはいくつもの小丘が低地から突き出しているが、竜門山地北部をふちどる花崗岩質岩からなる飛鳥の丘陵も、全般的には沈降性の山麓線を示していて、複雑な肢節に富む山麓となっている。標高150mから200mの丘陵と山地との境界が、北東・南西方向をとって直線状となっているが、このような構造線に規定されている丘陵内部には、低地との比高数十mの低位丘陵が分布しており、それらは200m前後の高位丘陵を取り巻いている。さらに低位段丘・中位段丘・高位段丘や扇状地などが複雑に入りこんでおり、たとえば、橘寺の西方の聖徳中学校校庭の南側から西方に伸びる尾根などは、低位段丘面とほぼ同じ標高で谷底との比高は20m程度であるが、この堆積面（聖徳面）は、奈良盆地南縁における高位段丘面に相当している。現在の地形から見ると高取川流域となっているが、本来は、橘寺面の段丘と同様に、丘陵間を抜けて西流した飛鳥川分流によって形成されたものと考えられ、聖徳中学校付近では風化した花崗岩からなる低位丘陵が、より低い尾根をつらぬいていて、部分的には地形の逆転が示されていて、当該の段丘面の関係はかなり複雑なものとなっていることなどを指摘できる。

明日香村の地形の複雑さの一例を紹介したが、この地域に存在している遺跡や史跡の多くが立地しているのは、主として低位段丘や扇状地である。

以下、遺跡と地形との関連を述べたい。飛鳥川は石舞台古墳付近から島之庄と岡の集落をのせる低位段丘を形成していて、岡の対岸の段丘上には橘の集落がある。この付近の河道に沿っては、狭長な谷底面が発達、岡付近での低位段丘面と谷底面との比高は約５m、現河床は谷底面を３mほど切り込んでいる。谷底面を切り込んだ河道に沿って花崗岩質の基岩が部分的に露出していることに注目したい。このような様相は島之庄付近のような丘陵縁だけではなく、低位段丘の中央を流れる岡付近においても同様で、基盤岩を２、３m切り込んでいる。要するに低位段丘面を切り込む飛鳥川は硬岩の存在によって、下刻作用を遅らせて小規模な遷急点を形成しているわけである。

また、岡の西部の飛鳥川谷底面の住宅地のやや北方では、右岸の低位段丘はⅠ面、Ⅱ面の２段に分かれている。このうち南の低位段丘Ⅰ面（岡面）には、島之庄と岡の集落が立地、北の低位段丘Ⅱ面（飛鳥面）には飛鳥集落が立地している。この二面を分けている段丘崖は、岡の西部では比高3.5m程度であるが、伝飛鳥板蓋宮跡の北を吉野川分水路に沿うようにして北東に走るにつれて比高を減じる。段丘崖は、飛鳥小学校校門の前を通って雷丘の麓から北西に向かう飛鳥川に沿ってなお１kmほど認められるが、小山の西方になると消滅してしまう。飛鳥から小山に至るこの最低位の段丘の東の山麓側では、山田から流下する小流が奥山集落を北流するあたりで４m前後段丘面を下刻して、一段低い谷底平野を形成している。この流路は香久山方面へは向かわず、沖之岡を過ぎて丘陵面を北東流する。このように飛鳥川右岸の低位段丘Ⅱ面は、両側を２～４mの段丘崖に限られながら、香久山の西方まで伸びて現氾濫原の下に没していくわけである。これに対して、飛鳥川左岸でも甘樫丘北麓から低い段丘崖が連なっていて、田中町方面の扇状地を段丘化している。段丘崖は明瞭ではないが本薬師寺跡付近と推定されている。

Surface Changes in the Nara Basin、『奈良女子大学文学部研究年報』、第26号、1985年など。

要するに、飛鳥川の現成の扇状地は、小山の西方付近を扇頂とする段丘化した扇状地、または上位扇状地とも呼びうる飛鳥河谷沿いの飛鳥面の低い段丘の前面に形成されている。したがって、飛鳥川流域においては、氾濫がしばしば繰り返されてきた。大規模な洪水氾濫と河道の変更、あるいはまた砂堆の形成が、この現扇状地の上で行われていたと言ってよい。

それゆえ、かつての飛鳥川は、現在の状況から思い浮かべるような、穏やかな河川ではなかった。地殻変動による河道の変更もあったし、洪水氾濫も度重なる河川であった。水量も、現在よりはるかに多かった。上流部は、豊富な水量のために灌漑用水として利用されてきたし、木葉堰・豊浦堰・大堰・今堰・橋堰・飛田堰・佐味堰の７堰が設けられていたことも史料に見える。『万葉集』の「今日もかも明日香の川の夕さらず河蝦鳴く瀬の清けかるらむ」のように、かわずの鳴声の聞こえる静かな清流である一方では、「今行きて聞くものにもが明日香川春雨降りて激つ瀬の音を」のように、いったん雨が降れば激流になり、川の様相も一変するほどの荒々しさを見せる川でもあった。複雑な飛鳥の地形を形成したきわめて活発な河川であったし、いわば荒川とでも言いうる猛々しい性格をもつ川でもあったことを忘れてはならない。飛鳥における石敷き遺構の多くも、洪水対策としての側面を有していたことが、この点からも理解できるのではないか。

繰り返しになるが、古代飛鳥の主要な舞台は、低位段丘と扇状地性の氾濫原であった。これらの地層は、未風化の花崗岩質のこぶし大の礫が粗砂に充填された砂礫層からなっており、表層には灰色ないし灰褐色の細粒氾濫原堆積物が堆積している。要するに、飛鳥の遺跡・史跡の多くは、奈良盆地低平部のような細かい粒子からなる地層とは異なっているのである。

（２）高句麗・百済・新羅・飛鳥における「石の文化」

飛鳥川のほとり、たとえば稲淵の川辺に立って、周辺を見渡してみよう。あちこちに花崗岩の白っぽい岩肌が突出していて、あたりの緑色と溶け合っている。筆者、なんどとなく、これら花崗岩の露出をみているうちに、ふと韓国の慶州や扶余の光景を思い浮かべてしまうという体験をした。伝飛鳥板蓋宮に広がる石敷き遺構に、慶州の発掘現場を思い浮かべるという経験もした。あくまでも、筆者の個人的な体験ではあるが、しかし古代朝鮮半島から渡来してきた人たちもまた、同じような印象を持ったと想像することに、さほどの抵抗はない。

要するに高句麗・百済・新羅も飛鳥も「石の文化」という点で共通していると考えてよいのではないか。飛鳥の自然景観に朝鮮半島からの渡来者は、「故郷の色彩」「郷土の風景」を感じ、それゆえにこそ、大和朝廷に対して、自らの故郷を再現しようとの意図を秘めつつ、各種の土木工事・建築工事を進言し、いわゆる「謎の石造物」を配置しようとしたのではなかろうか。しかも先にも述べたように飛鳥の南には、南山と呼ばれる聖なる山地が広がっている。新羅の都、慶州の南にも、「南山」と称される聖なる空間が連なり、そこには石仏も点在する信仰の山間が展開している。いわば空間構造の点から見ても、飛鳥と古代朝鮮の都城には共通項が多く見られるのである。

筆者はこれまでに東アジアの都城をめぐる旅を繰り返してきたが、朝鮮半島における「石の文化」と「山城の稠密さ」という強烈な印象を抱くことが多かった。個々の遺跡についての具体的な印象は、前著

にも述べているから本稿では省略するが、ごくかいつまんで言うと以下のようなことになる[19]。新羅の古都、慶州には日本で見慣れたような、しかしそれでいてどこか異なるような風景が展開していた。天馬塚、半月城の土石塁と周濠、石氷庫など、日本のものとの類似性がある一方で、多少の違和感もあった。仏国寺の石段や有影塔・無影塔の組木細工のような精巧さは日本には存在しない。これらは、地震の少なさと石材の豊富さ、逆に言えば木材の希少さがその背後に潜んでいると思う。新羅はまさに石の文化の地域である。同様に、百済も石の文化ではあるが、その様相は新羅とは、根本的に異なるものであった。すなわち、新羅の石造物にくらべると百済のそれらははるかに柔らかいものであって、一口に石の文化圏とは言っても地域性を忘れてはならない。そしてこの印象は、のちに高句麗の遺跡を見ることによっていっそう強い確信となった。

白馬江が広い視界を展開する大河であるためか、扶余の都城には広々とした感じをうけたが、対して公州の都城は閉塞的であった。しかしともに山城と羅城のセットである点では共通している。ただし扶蘇山城も公山城も標高や比高からすれば、ともに低い山城であって、純粋の軍事施設というよりは宮殿地区としての意味合いが強い。ところが、水原における市街地と東西の山を取りこんだ李朝時代の壮大な城壁と城門は、日本には類のないものであって、山城と都市を囲む羅城は、扶余や公州のように本来は独立したものであったが、いつの時期かに統合された可能性が強い。さらに南漢山城の山上の中心部が盆地状の凹地になっていることも、古代日本の山城とは決定的に違う。これにくらべると日本の山城は単に山頂部を石垣や土塁で取り囲んだにすぎないと言ってよく、古代日本にも山城はたしかに築造されたが、それらははっきり言うと、一種のまがい物であったと言っても過言ではない。

要するに、古代日本においては、朝鮮半島の山城を模倣した山城的な施設はたしかに実現した。しかし山城の本家ともいえる朝鮮半島の山城は、純軍事的な峻険な山城があるいっぽうで、城内に平地を有する大規模な山城も構築されたし、宮殿地区として使われるいわば近世日本でいうところの平山城的なものも建設されていた。きわめて多様な山城が存在したことになる。ここでは詳述を避けるが、高句麗・百済・新羅における山城は、地域によって大きく異なっていることを忘れてはならない。ごく単純化していえば、高句麗は「包谷式」、百済は「鉢巻き式」、新羅は「折衷式」と言われる。しかし百済の二聖山城や五金山城は、どちらかといえば「包谷式」である。中国の集安の丸都山城や平壌の大城山城との共通性が多いことも否定できない。これまでの研究でもあまり強調されてこなかった百済文化への高句麗文化の影響が、古代山城の形態からもうかがえるのである。そしてこのことは、新羅をも含めて、古代朝鮮三国を再考すべきであるとの反省にもつながるべきであろうし、ひいては古代日本における高句麗評価の必要性ということにもなるであろう。しかも朝鮮半島ではこれらの多様な山城は、都市全体を囲い込む羅城とセットになっていくという事実も認められる。おそらくはこれらの都市壁の実現には、中国の都市全体を囲む城壁の影響を考えてもよいのではなかろうか。

これら「渡来人と故郷の風景」や「故郷への憧憬」という点でいえば、日本国内で、飛鳥以外にも同じような地域をあげることができる。たとえば、滋賀県の蒲生野と百済文化がそれである。筆者、蒲生町（現東近江市）の石塔寺の急な石段を登りきったとき、眼に飛びこんできた光景に、言いようのない

19）高橋誠一『東アジア都城紀行』、ナカニシヤ出版、2007年。

既視感覚におちいったという経験をしたことがある。石塔寺を訪れたのは初めてであった。にもかかわらず、眼前に立っている三重石塔は、すでに見たものであるとの不思議な感覚を拭い去ることができなかった。

思い浮かんできたのは、それより数年前に訪れた韓国扶余（忠清南道扶余郡）の公園で見た石塔であった。高さ約８m、やや白味をおびた褐色のこの塔は、百済文化に特有の丸みと暖かさを伝えるが、石塔の表面には、百済を滅亡させた唐の将軍によって戦勝記念としての「大唐平百済国碑銘」以下の文字が刻まれている。この百済の「平済塔」と、蒲生の石塔寺の石塔の実際の形はかなり異なっている。扶余の塔は五重であるのに対して、石塔寺の塔は三重であり、しかも石塔寺の塔には後世の相輪もつけくわえられている。にもかかわらず、完全に同じものと感ずるほどに、その雰囲気やイメージが共通しているのである。高さ約８mの花崗岩でできた三重石塔は奈良時代前期の作と推定されており、古くから阿育王の伝承をもっているが、まさしく百済文化を具現化したものにちがいない。実はこのあたり一帯は、古代朝鮮からの渡来人が数多く居住していた場所であった。『日本書紀』天智天皇４年（665）に百済から渡来した鬼室集斯の名が見え、８年に近江国の蒲生郡に遷し居いたと記されている。鬼室集斯は朱鳥３年（689）に没したが、彼をまつるのが蒲生郡日野町小野にある鬼室神社で、現在も韓国に所縁のある人たちの崇敬を集めているし、韓国のマスコミなどに紹介されることも多い。

いずれにしても、鬼室集斯の系譜をひく子孫が、奈良時代になってから、先祖の故地である百済を偲んで、石塔を造ったと考えてよい。しかもこの地は、百済系渡来人だけが居住したわけではなかった。『書紀』の垂仁天皇３年の条には、新羅の王の子である天日槍が近江国に住んだこと、近江国の鏡村の谷の陶人は天日槍の従人であることなども記されているし、近隣の鏡山には滋賀県でも代表的な須恵器焼成用の登り窯群が存在し、その山麓には須恵という地名も残っている。さらに周辺部には綾戸・弓削、服部、木部、石部等々の古代手工業に関連する可能性の強い地名も多数みられる。古代の手工業のすべてが古代朝鮮から伝来したものとまでは言えないが、かの地からの渡来人による先進的地域を成立させていたことは確実である。

また東近江市や蒲生郡一帯に、石塔寺以外にも石塔などの遺物・遺跡が多いことをも強調すべきであろう。古代朝鮮における「石の文化」は、近江の蒲生野一帯にも植えつけられていた。奈良県の明日香村が韓国の忠清南道の扶余郡と姉妹都市提携を結んでいるのと同様、東近江市蒲生区は扶余郡場岩面、蒲生郡日野町は扶余郡恩山面と姉妹都市提携を結んでいるのである。

四　飛鳥の要塞化と文化交渉 ――むすびにかえて――

（１）飛鳥の都市計画と要塞化

先述したように、古代の奈良盆地は、その周辺地域をも含んだ広域的な視野から策定されたマスタープランによって、交通体系が整備され、宮都もしくは都城さらに寺院などの諸施設も建設されていった。藤原京や古代大和の直線道路の存在などを考えれば、最終的な結論は提示されていないとはいえ、飛鳥に方格地割を基本とする都市計画が意図され、具現化されたであろうと考えることに、さほどの無理があるとは思えない。

このような広域的な都市計画を考える上で、きわめて重要な意味をもつのは、『日本書紀』斉明天皇２年（656）の記事である。すなわち

是歳、飛鳥の岡本に、更に宮地を定む。時に、高麗・百済・新羅、並びに使を遣して調進る。為に紺の幕を此の宮地に張りて、饗たまふ。遂に宮室を起つ。天皇、乃ち遷りたまふ。號けて後飛鳥岡本宮と曰ふ。田身嶺に、冠らしむるに周れる垣を以ってす。田身は山の名なり。此れをば大務と云う。復、嶺の上の両つの槻の樹の邊に、観を起つ。號けて両槻宮とす。亦は天宮と曰ふ。時に興事を好む。廼ち水工をして渠穿らしむ。香山の西より、石上山に至る。舟二百隻を以って、石上山の石を載みて、流の順に控引き、宮の東の山に石を累ねて垣とす。時の人の謗りて曰く、「狂心の渠。功夫を損し費すこと、三萬余。垣造る功夫を費し損すこと、七萬余。宮材爛れ、山椒埋れたり」といふ。又、謗りて曰く、「石の山丘を作る。作る随の自づからに破れなむ」といふ。若しは未だ成らざる時に據りて、此の謗りを作せるか。

斉明天皇が、この記事だけではなく、水時計台や噴水施設の建設に力を注いでいたことは、『日本書紀』にも記されているし、それに該当すると推定される遺跡も明らかにされつつある。ところが、「両槻宮」、「狂心渠」、「宮の東の山」の石垣などについては、長い間、謎に包まれていた。わずかに「酒船石」と呼ばれる「謎の石造物」が古くから知られているにすぎなかった。

ところが1992年に、古くから知られていた「岡の酒船石」の北側に近接した場所から、花崗岩の上に砂岩の切石を積み上げた石垣が発見されたことによって、事態は急変することになった。この石垣の築かれている丘陵そのものに人工的な版築工事が施されたことも確認され、さらに明日香村による調査によって、花崗岩の上に砂岩の切石を積んだ構造をもつ石垣が、丘陵の中腹を700m 以上にわたってめぐらされていることも明らかとなった。この「酒船石遺跡」と名づけられた遺跡は、丘陵西縁部では版築土を造成し、表面には三重の石垣も設けられていることも判明した。しかも2000年の調査では丘陵の北端から、「亀」の形をした石造物「亀形石（亀形石造物）」や「湧水井戸」、小判形の石槽、石組みの階段などが発見された。亀形石の石材加工技術が「酒船石」や石神遺跡出土の「須弥山石」や「石人像」と類似していること、使用されている切石が天理市内で産出する砂岩で「酒船石遺跡」の石垣と同様であることなどから、斉明紀のものであることなどもほぼ確実視されている。

これらの遺跡、すなわち「酒船石遺跡」と亀形石を中心とする導水施設をめぐっては、いろんな説があって、多くの議論を呼んでいる。この酒船石遺跡と導水施設を別々の用途のものとして考えるのか否かについても結論が出ているわけではない。また「多武峰」と「田身嶺」、「岡寺山」、飛鳥の「甘南備山」、「ミハ山」、「飛鳥神名火山」の関係についても、その具体的な事実がわかっているとは言えない[20]。さらに、最近では門脇禎二氏の興味ある説も提示されている。すなわち、斉明紀の「田身嶺」は必ずしも談山神社のある「多武峰」に限定して考える必要はなく、より広く「飛鳥」の東から南にかけての山塊全体が、当時は「田身の山」と呼ばれていた可能性が高いとする説も提示されている。このように考えると「田身嶺」は「田身山」の一部であり、岡寺山や甘南備山、観や宮の東の山なども、より多くの

20）黒崎直『飛鳥の宮と寺』、山川出版社、2007年。

可能性を含んで議論できることになる[21]。「酒船石遺跡」と「亀形石」、さらに「両槻宮」、「天宮」、「周垣」、「狂心渠」などを、一連の関連施設と考えるか否かについての議論も解決されているわけではない。

これらについては、これまでに、実にさまざまな推定もしくは想定が活発に展開されてきた。道教やゾロアスター教などの宗教施設であると考える説、饗宴なども行われる庭園施設と考える説、聖なる水と聖なる山を象徴する施設であるとする説、軍事施設であるとする説、等々、きわめて多面的な機能が提示され、それらは単に独立した機能・用途のみではなく、相互に関連する複合的な施設である可能性も提示されてきた。たとえば千田稔氏による説などは、きわめて多くの示唆に富むものとして注目すべきであろう。氏は、斉明天皇の時代背景をふまえて、狂心渠、石垣、田身嶺の垣、槻の木、両槻宮、天宮、亀などを一連のものとしてとらえて、道教寺院、道観の建設を想定している[22]。このように、多くの研究者によって、多面的かつ立体的な説が展開され、松本清張氏によるペルシア文化の影響を論じた小説も多数の読者を魅了してきたこと、改めて言うまでもない。

このうち「狂心渠」については、奥山集落の西側を南北に通じている窪地などの遺構が判明しているし、すでに天理市街地においても関連する運河遺構が確認されている。しかも「酒船石遺跡」における砂岩も天理市平尾山付近に見られるものと推定されており、それゆえ「狂心渠」と「酒船石遺跡」、「宮の東の山」の石垣は、互いに密接に関連した土木工事と把握してもよさそうである。そこで、「宮の東の山」にめぐらされた「酒船石遺跡」などの石垣について考えてみたい。

先述のように、この石垣遺構については、さまざまな用途・目的・機能が想定されているが、結論を言えば、古代朝鮮式山城築城を除外して議論することはできないと考えたい。実は、「酒船石遺跡」の発見以降の調査によって、当初確認されていた局所的な遺構のみではなく、かなり広い範囲にわたって関連すると想定できる遺構の存在が指摘されているし、筆者らの現地調査によっても、「宮の東の山」には、砂岩のブロックや、花崗岩の石列などが点在していることを観察しえた。たとえば、あくまでも地表上の観察ではあるが、治田神社の西方約200mから北方の丘陵には人工的造成地が連続して見られるのである。すなわち治田神社西方約200mの丘陵－北東約150m－北へ約100m－西に約150m－約100mの湾曲部－東と東南東約100m－北へ約50m－西北西へ約200m－東から北東へ約150m－南へ約150m－東南東へ約200mというように人工的な地形改変が見られる。要するに屈曲している丘陵を取り囲むように、人工的造成地が認められるのである。ここでいう丘陵を囲むという表現は、丘陵と平地部との境界という意味ではない。平地、要するに飛鳥の盆地面から丘陵へは、全体的傾向として東へ標高が上がっていくが、傾斜面を東に上がりきった地点、すなわち丘陵面の端という意味である。筆者らの踏査は、あくまでもごく地表上の観察でしかないし、この人工的な造成地が、はたして遺構として連続したものなのかどうかについても判然とはしない。想定を積み重ねれば、人工的造成地を石垣のルートとして考えることも可能ではあるが、途切れなく連続しているという根拠もない。しかし、これ以外にも「宮の東の山」には人工的な手が加えられた石材や造成地が各所に点在しているのである。さらにまた、これらの

21）門脇禎二「『田身嶺』について」、『飛鳥文化財論及』、納谷守幸氏追悼論文集刊行会、2005年。

22）千田稔『飛鳥――水の王朝』、中央公論新社、2001年。

丘陵地や多武峰一帯には、数多くの中世山城が分布していることも、付け加えておきたい[23]。

この石垣の造成が、山城の構築を目的としたものであったと考える根拠として、当時の東アジアの緊迫した国際関係をあげておきたい。隋・唐の侵攻に対する高句麗の抵抗、高句麗の南下政策と百済の抵抗、高句麗や百済の圧力と新羅、任那などをめぐる新羅と日本の対立、「隋・唐と新羅」対「高句麗・百済・日本」という図式など、局面々々によって、微妙に均衡が変化しつつも、常に緊張感に満ちた状況が繰り返されてきた。その結果として、高句麗と百済の滅亡、白村江における唐と新羅の連合軍との戦いと日本の敗退、統一新羅の成立という経過をたどっていった。このような国際情勢の下、特に白村江戦以降に日本は国家的な見地から、西日本の戦略的な拠点に山城を築き、烽燧による情報伝達ネットワークを作り上げていった。いわゆる神籠石遺跡もこのような防衛計画と密接に関連するものであった[24]。

ところがそれまでの日本には、弥生時代における高地性集落のような防御集落こそ存在したものの、山の上に城郭と呼びうるほどの軍事施設を築くという事例は存在しなかった。『日本書紀』の記録によっても、これら７世紀の山城は百済からの渡来人の指導によって築かれたことが明記されている。したがってこれらの山城は、「石の文化」の象徴でもある石垣による古代朝鮮三国特有の軍事施設を導入したもの、すなわち「古代朝鮮式山城」という用語で呼ばれているのである。古代朝鮮三国において、いかに多くの山城が築かれたかは『三国史記』を見れば、如実に理解することができる。三国間の戦争は、まさに「山城の争奪戦」であったと表現できるほどのものであって、むしろ平地に陣を展開して相対するという戦闘は例外的であったことも明らかである。『三国史記』には「無数」とも言うべき多数の山城が記載されているのであり、しかもこのような状況は古代に限ったことではなかった。たとえば近世の朝鮮において発生した民衆の抵抗戦などの鎮圧は困難を極めたが、この理由の一つとして、不利になれば近隣の山城に逃げ込むことが一般化していたことがあげられる。またこれらの各地域の山城は、単なる逃げ城としてだけではなく、いわば「地域神」としての信仰の対象にもなっていた。それゆえ朝鮮半島は、古代から近世に至るまで「山城の地域」でもあった[25]。

このような地域から渡来してきた古代渡来人にとって、生活圏の周辺、身近な場所に、いざという時に逃げ込んで抵抗拠点とすることの可能な山城が存在しないという状態などは、想像すらできないものであったと言わざるを得ない。ましてや広域的な都市計画の展開を目指す首都とその周辺に、山城が存在しないということなどは、「在り得ない」と認識されたに違いない。

23）前掲関西大学文学部地理学教室、1995年。村田修三「中世城郭の縄張り」、『日本城郭大系　別巻１』、新人物往来社、1981年。

24）高橋誠一「古代山城の歴史地理」、『人文地理』24-５、1972年（高橋誠一『日本古代都市研究』、古今書院、1994年に収録）。

25）高橋誠一「東アジアの古代都市」、『地理』25-９、1980年。同「古代の都市と城壁」、京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』、地人書房、1982年。同「古代朝鮮の都市」、藤岡謙二郎編『講座　考古地理学　２』、学生社、1983年。同「古代朝鮮・日本の都市と城壁」、藤岡謙二郎編『城下町とその変貌』、柳原書店、1983年。（いずれも高橋誠一『日本古代都市研究』、古今書院、1994年に収録）。

（２）飛鳥における渡来人と文化交渉

以上、古代飛鳥には軍事的な意味での「要塞化」という工事が施工されたと考えたい。その具体的な記事が斉明紀の一連の土木工事であった。もっともこの想定には、『日本書紀』のどこにも「山城」などの軍事的施設を築造したという記録が見られないという反論が予想される。しかし、軍事的な施設を築造・構築する際に、文献史料に明記することなどは、むしろ考えられないと言うべきである。いかに『日本書紀』が後世に編纂されたものであったとしても、その当時にはこのような構想と配慮でもって軍事施設を作り上げ、国土の防衛を図ったなどと記録にとどめることのほうが、むしろ原則をはずれたものであったとするのが妥当ではなかろうか[26]。

とは言いながら、これら斉明紀の一連の工事が、軍事的目的のみであったとも断言できない。諸説で想定されている宗教が道教なのかあるいはゾロアスター教なのかという点については不明であるとしても、宗教と軍事という一見すれば異質の機能が、実は密接に関係していることは、古代朝鮮式山城と神籠石遺跡などに宗教的施設が設置されていること、あるいは後世に宗教的聖地に変質していくこと、あるいはまた、自分たちを守ってくれる場所という意識から、宗教的拠り所として崇拝されるようになっていく例が多いことなどをもって証左とすることができる。先述したように朝鮮では、山城が「地域神」として信仰の対象になっていること、また琉球におけるグスクが御嶽などの宗教的聖地と一体化している事例の多いことなど、世界的視野からしても、まさに枚挙に暇がないほどである[27]。自分たちを守ってくれる施設という点では、軍事施設も、神が依り宿る「依り代」も同じものであるとの認識が広く流布していたと考えるべきであろう。一方で主張される饗宴のための庭園施設という空間も、防衛や宗教空間と、全く相容れないものであったとは言えない。むしろ根本のところで、「ありがたいもの」は「憩いの空間」でもあり、「美しい空間」でもあった。

しかも斉明紀をはじめとした飛鳥の要塞化は、「宮の東の山」に限ったものではないことも想定したい。奈良盆地と大阪平野の境界には、周知のように古代朝鮮式山城である高安城が築かれ、後の壬申の乱の際にも利用されている。また飛鳥・藤原から盆地北部の平城京に遷都してからは、生駒山や信貴山に軍事的施設が築かれた可能性も高く、しかもこれらの施設には緊急時の連絡手段としての烽燧も設置されていたと考えられる。現奈良市街地の東方、奈良公園の一角には「飛火野」という地名が残されているが、これなども古代の烽燧が設置されていたことを連想させる。とすれば、飛鳥・藤原の周辺にも、西方からの緊急連絡を伝達するための烽燧が設けられていたことは充分に想定できるのである。具体的な根拠を提示できるわけではないが、高安城をメインステーションとして、畝傍山、耳成山、香久山さらに甘樫丘などには烽燧が設置されていたと想定したい。もちろん単なる烽燧だけではなく、これらのポイントには、機動性に富んだ防衛施設も設けられていたであろう。また烽燧による情報だけでは詳細の伝達は困難であったから、詳しい情報は、竹内峠から横大路を通じてもたらされたとも考えたい。こ

26）飛鳥における防衛施設構築の可能性について、筆者はすでに1979年の座談会で発言している。ただしこのころの筆者は古代朝鮮の山城についての実見体験が乏しく、控えめな想定を超えるものではなかった。伊達宗泰・千田稔・高橋誠一「飛鳥の地理を語る」、『地理』24巻３号、古今書院、1979年。

27）高橋誠一『琉球の都市と村落』、関西大学出版部、2003年。

のような工事の際に、戦乱に明け暮れることの多い古代朝鮮からの渡来人の指導は不可欠であった。

ところが、古代朝鮮の影響と言っても、実は、それほど単純なものではない。言うまでもなく古代朝鮮半島には、先述したように三国が鼎立しており、隋・唐と日本がその三国と密接に関係しているという複雑な国際情勢があった。したがって朝鮮半島から渡来してきた人たちの出身地も、さまざまであったし、渡来に至った理由も異なっていた。ごく単純化して言えば、隋・唐と新羅、日本と高句麗・百済の連携ということになるが、この図式も、時期によって微妙に変化しているという状況で、したがって、彼の地から渡来してきた人たち、さらにその系譜につながる渡来系氏族も、百済・高句麗・新羅という大枠の違いはもとより、日本への渡来理由も、日本の要請、故国からの緊急避難、あるいは日本への先発渡来者の勧誘等、きわめて多岐にわたっていたに違いない。それゆえ、彼ら渡来系氏族の日本における政治力や発言力もまた大きく相違しており、しかも他の有力氏族との関係によっても、その影響力には大きな差異があり、時期によって、変容するという情勢であったことは否定できない。とすれば、飛鳥の広域的都市計画構想への参画の程度も、その理念また地理観はもとより、具体的工事の手法にいたるまで、大きく異なっていたことは充分に推定できるのである。

すなわち、同じ軍事的施設を建設するとはいっても、百済・高句麗・新羅では、山城のプランや建設手法には相当な相違がある。したがって山城一つを建設するに際しても、古代朝鮮三国からの渡来人の主張が対立したであろうことも充分に想定できる。そこにはまさに文化の衝突があったであろうし、微妙な駆け引きによる文化交渉も見られたであろう。渡来人相互の駆け引きや衝突は、単に彼らの間だけの論争や対立にとどまらなかった。いかに大和朝廷に自分たちの主張を認めさせるか、それによって渡来人のその後の日本における立場や故国への影響も、きわめて甚大なものがあったに違いない。いわば、それは単なる山城の様式や構築方法という枠におさまらず、渡来人やその一族の「生死をかけた」論争でもあった。文字通りの「厳しい文化交渉」が飛鳥の小盆地という舞台で展開されていたと思われる。